

# ICF: 国際生活機能分類

## 一人が生きることの全体像についての共通言語

- 世界保健機関(WHO)

International Classification of  
Functioning, Disability and Health

ICFは「生活機能」に問題のある人を全体的にとらえ、整理するのに適した枠組み

専門家と当事者(利用者本人、家族等)との「共通言語」となるもの

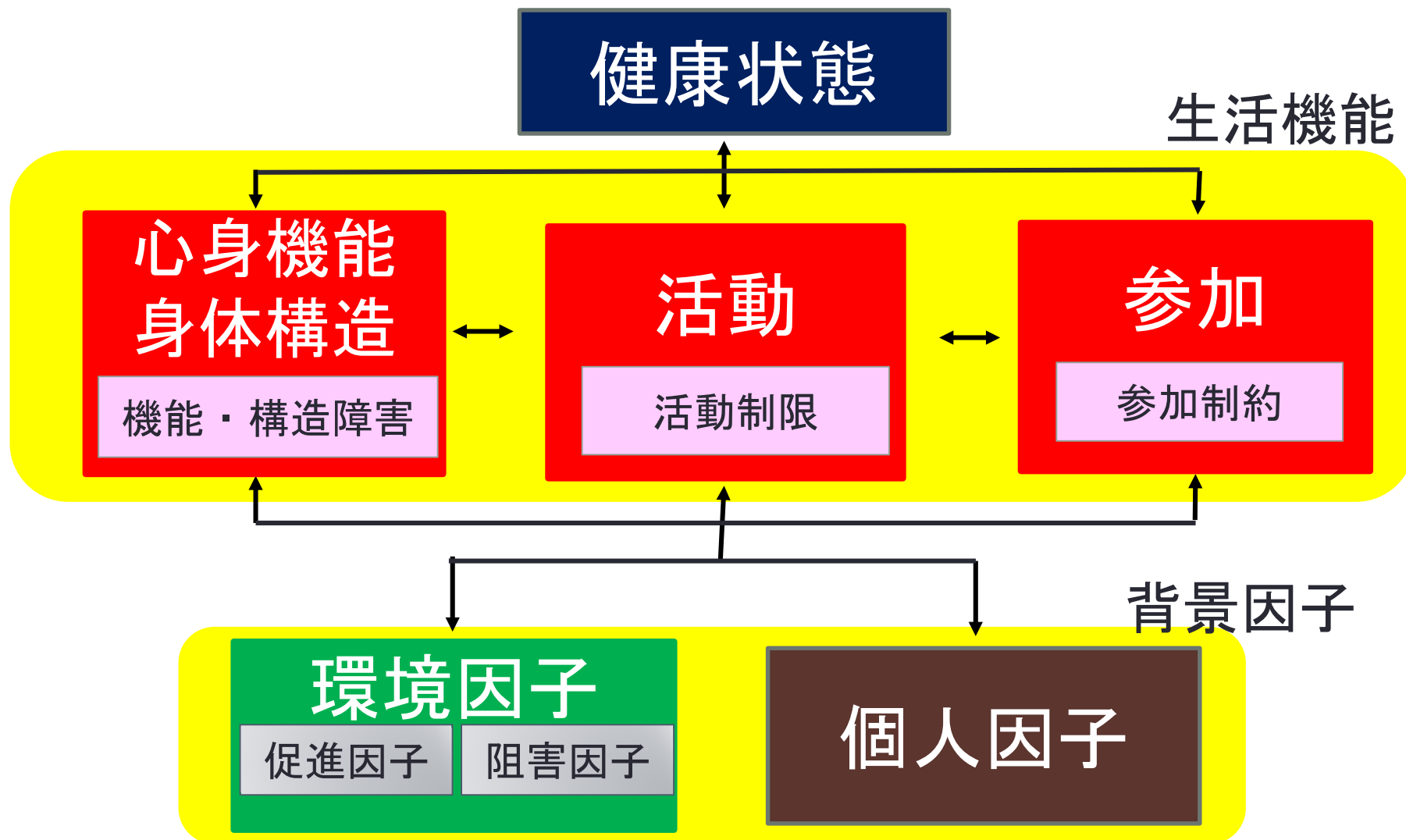
共通のものの見方、とらえ方

国際障害分類の改訂版

障害というマイナス面の用語だった

- 「生活機能」とは、人が「生きる」ことの3つのレベル(心身機能・身体構造、活動、参加)の3階層のすべてを含む
- 疾患にかわる健康状態とは、病気や怪我だけでなく、高齢、妊娠、ストレス等、人が生きるのに影響を及ぼすすべてのものを含む概念になった
- マイナス面だけでなく、生活機能というプラス面をもみっていく

**国際生活機能分類の図** \* 全体像を理解した上で、特に活動を把握し、働きかけ、個人因子・環境因子を活用し、参加・生活の質の向上を図る支援が、各専門スタッフには求められる。



## 各レベルの定義1

- 心身機能・身体構造  
生物レベル、生命レベルで  
身体の働きや精神の働き、  
また、身体の一部の構造  
のこと。

それらに問題が起こった状態  
が「機能障害」(例えば、手  
足の麻痺、関節の拘縮)と  
「構造障害」(例えば手足の  
一部の切断など)。

- 活動

個人レベル、生活レベル

生きていくのに役立つさまざま生  
活行為のこと。

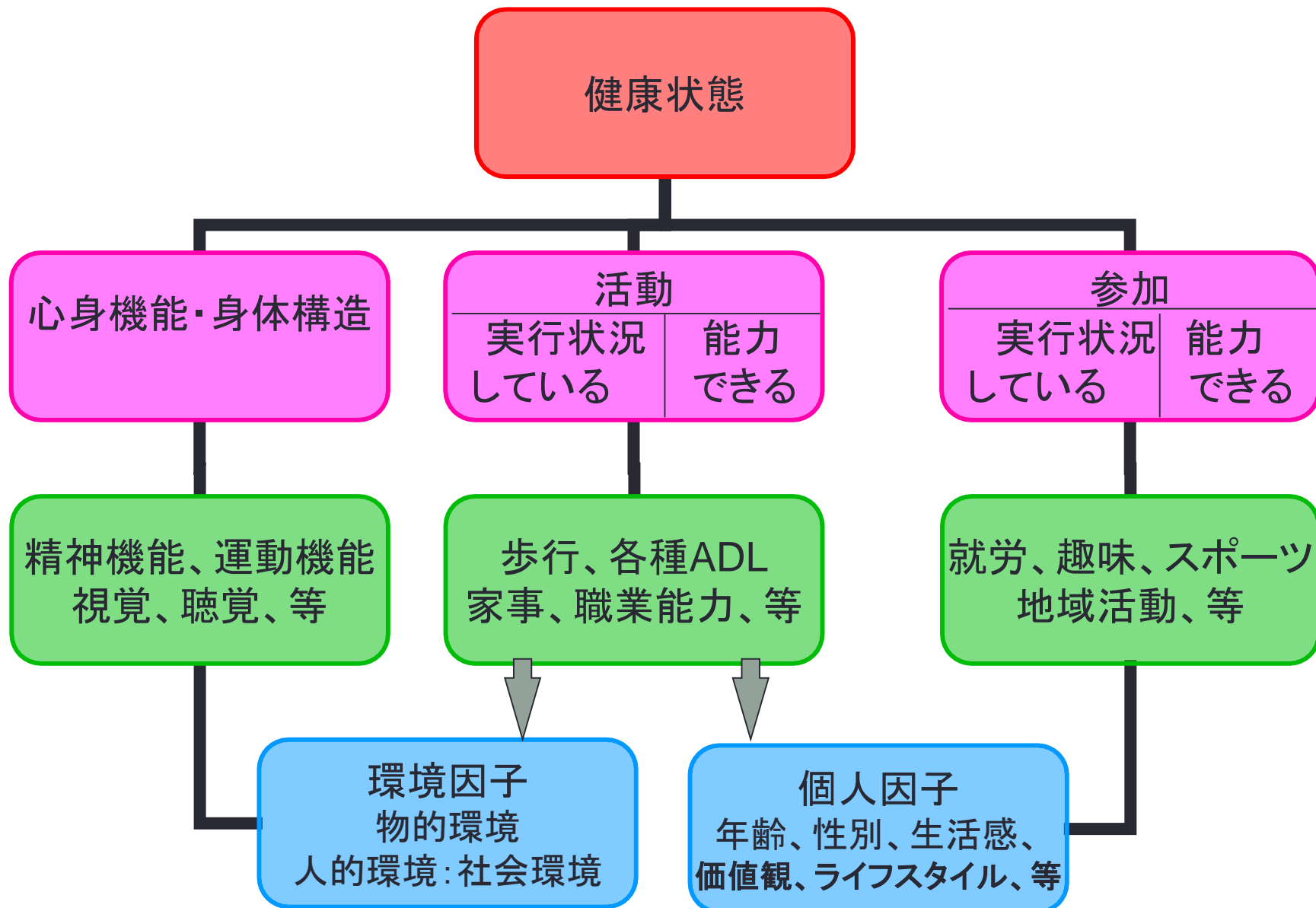
### 日常生活動作(ADL)

食事、排泄、移動、更衣 入  
浴、整容、コミュニケーション等

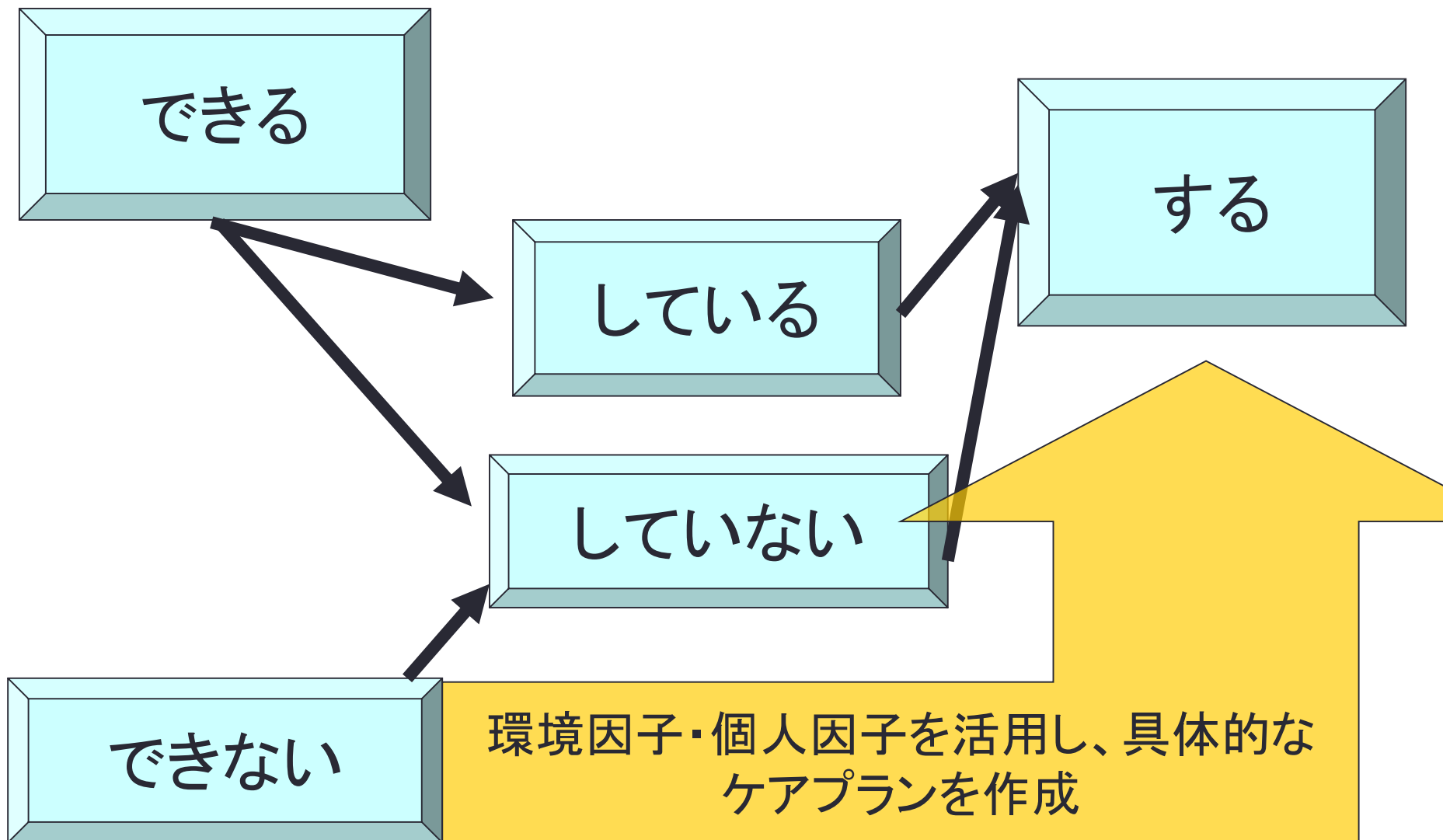
### 手段的日常生活動作(IADL)

炊事、掃除、洗濯、買い物、金  
銭管理、趣味活動、車の運転  
等

## 概念図(具体例が入ったもの)厚生労働省大臣官房統計情報部



活動 ⇔ ニーズにつながる  
能力評価 → 実行状況 → 目標:生活課題



## 各レベルの定義2

- 参加  
社会レベル、人生レベル

社会的な出来事に関与したり、役割を果たすこと。\* 社会、家族の一員としての役割・必要性

例えば、主婦の役割、親や祖父母としての役割、地域社会(町内会や交友関係)のなかでの役割、その他いろいろな社会参加。

それらが、困難になった状態が「参加制約」

### 参考文献

財団法人長寿社会開発センター

介護支援専門員基本テキスト

介護保険サービスとリハビリテーション

大川弥生著 中央法規

ICFの理解と活用 上田 敏著 発行 きょうされん  
萌文社

国際生活機能分類 一国際生活機能分類改定版一

世界保健機(WHO) 中央法規

### 環境

「物的環境」福祉用具、支援機器や住宅

「人的環境」家族・介護者  
\* 友人知人とのかかわり

「制度的環境」社会の意識や態度、さらに法制度、行政や各種のサービス(介護、医療、福祉など)

### 個人

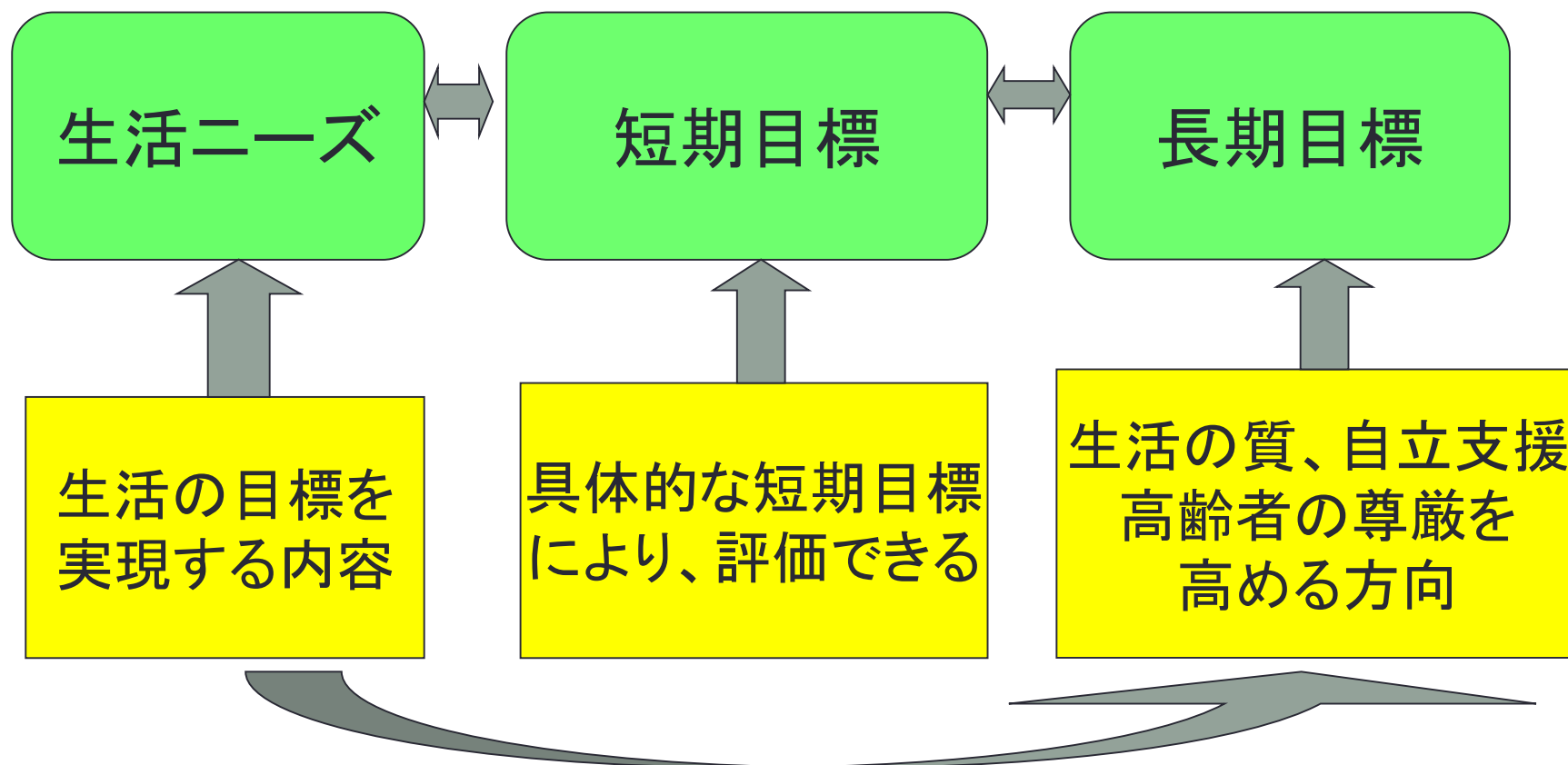
性別、年齢、民族、ライフスタイル

職歴、性格、好み等 \* 生活歴、生活の中の楽しみ、価値観

# 「活動」と「参加」の概念について

- 現在、ICFでは、「活動」と「参加」の概念はそれぞれ定義づけられているものの、分類項目は、「活動と参加」として一つにまとめられて提示されている。
- どの項目を「活動」として使い、どの項目を「参加」の項目として使うかは、使用する国や使用する目的に応じて設定することとされている。作り上げていく過渡期であることから、目的に応じて使用者の選択に任せる
- **一つの「参加」を実現するには、当該分類項目の「活動」以外に多数の「活動」が必要となる場合がある**
- ケアプランの生活の目標は、「参加」が含まれており、それを実現する「活動」が「する活動」として具体的に段階を追って、整理されていることが望ましい

生活ニーズを短期目標で実現し、長期目標により、生活の質の向上に向かっているかどうか。ケアプランが、生活の目標の実現に向かっているかどうか振り返る。





# アセスメントからニーズの導き出しの流れ

